

自治体SDGs推進のための有識者検討会（第3回）議事要旨

日 時：平成 29 年 7 月 27 日（木）10:00～12:00

場 所：永田町合同庁舎 7階特別会議室

出席委員：村上座長、蟹江委員、城山委員、藤田委員

◎議論

・ステークホルダーヒアリング

一般財団法人 CSOネットワーク事務局長 黒田かをり氏

博報堂CSRグループ推進担当部長 川廷昌弘氏

・第1、2回検討会における委員の意見取りまとめ(中間取りまとめ(たたき台))について

【委員からの意見等】

1. ステークホルダーヒアリング①

・一般財団法人 CSOネットワーク事務局長 黒田かをり氏

○ これからSDGsを自治体に定着させるのに、市民にいかに関心を持ってもらい、主体的に参加してもらえるかということが成功の一つの鍵だと感じている。市民のSDGsに対する関心をかき立てるにはどのようなことをしたらいいか、経験に照らして教えて欲しい。

【黒田氏】

○ 確かに地域に行きSDGsの話を一いきなりすると、非常に遠い話で、「何か難しい話」と言われることもある。SDGsの話は、そこからは入らないようにしている。地域の皆さんが取り組んでいることの話の中に、実は今、世界でもこういう話をしているということで話をしたことは何回かある。今日の話には出さなかったが、福島県の二本松市に東和というところがあり、ここは新聞社がやっている地方再生準大賞を取っている本当に素晴らしい取組をしている地域。そこの住民が最近の朝日新聞の国谷裕子さんの海士町の話を読み、うちもSDGsに取り組んでみようかなという電話を先週もらったばかり。もしかしたら、こういう様々な取組がSDGsとうまくつながる。例えば、メディアなど色々なところで発信されることで、「うちの地域でも取り組んでみようかな」と思うところもあるのではないか。

○ このSDGsの話は、内閣府や行政など、上から行くと市民は「そんな難しいことなんて」と思うが、もしチャンスがあったら黒田さんのグループで、SDGsを市民に紹介するパンフレットなどを作っていたいただければ大変ありがたい。私どもではできない。

○ SDGsを地域に展開するに当たって、町民・市民の参加の意識・理解を高めるといことが非常に重要だろうとこれまで2回議論してきた。その中でやはり、こういう形

で見える化、現在のご自身のステージが見える化するような形で、市場調査をするとい
うことで意識が高まり、それをまた継続的にやることによって意識の向上なり、あるいは
行動のエンハンスメントができるのではないかという印象で拝見した。そうした参加
のデザインを具体的に考えているようなら経緯を教えて欲しい。

【黒田氏】

○ 私どもは、本当に参加のデザインのところまでは、まだまだいけない。こういう
診断ツールで出てきた課題をどう解決したらいいのかまでは、自分たちの力だけではな
かなかできない。参加のデザインに特化しているようなグループや課題解決に向けた
色々な活動をしているようなところとも、私たち自身がもっと連携していかなければい
けないと毎日頃思っている。もう1点は、今回、静岡・牧之原市と黒部の話を少し紹介
した。いずれも地域の中に地域活性化をやろうとしているグループがいる。一つは社協
であり、一つは県立大だったのだが、やはり地元でそういう人たちがいないことには、
私どものような外部の人間だけではどうにもならない。その辺り、そういう地域で日々
そういうことに取り組んでいる人たちと密に連携していくことと、私たちも一回限りの
関係ではなく、同じグループと何年にもわたる付き合いの中でやっているの、そうい
うことで自分たちができることは非常に限られている。なるべく地域の人たちやそれ以
外のグループと連携をしていくことで、今の質問のようなことには少しずつ答えていき
たいと思っている。

○ われわれ委員の何人かが環境未来都市、環境モデル都市を直接担当している中では、
ぜひとも同じようなアプローチで横並びでやれると、非常に各都市間の比較も含めて相
互の理解が高まるのではないかと、そんな印象で拝聴した。

○ SDGsが一番いいのは、環境・経済だけではなく、またレジリエンスだけでもなく、
こういうことをすることが市民の活力になると分かりやすく示すということ。そこにS
DGsの意味があるのではないかと。これも過去2回議論してきたが、そういう中で共生
社会や経済・金融等、この6つの指標は丁寧に選ばれたとは思いますが、相互の連携ある
いは相互の相関性のようなものを今まで入った自治体で感じたところがあれば聞きたい。

【黒田氏】

○ 相関性のところまでは、まだきちんと見ることができていない。私たちもまだこれを
始めて2年目で、幾つか課題もある。実は、相関性も見ただ方がいいという意見もあるの
で、そこはぜひ前向きに検討していきたい。今の質問と直接は関わらないかもしれない
が、これまでの地域で、地域づくりであったり、地域活性化に前向きに捉えているとこ
ろに呼んでもらうことが多いが、共生社会は比較的どこも高いではないかと思った。一
方で、日本のこれまでの地域の伝統などもあると思うが、ジェンダーというところはこ
れからだということも結構多いと思っている。もう少しきちんと分析できるような形
にはしていきたいと思っている。

○ 診断をしたということだが、診断の次に来るのは、何か問題があれば治療するという話だと思う。その辺の今後に向けたビジョンというか、今後どういうステップをやるうとしているのか聞きたい。その中で今、委員の発言のような問題の間の関連なども出てくるのではないかという気がする。SDGsの場合は、ローカルの人たちが自分たちでソリューションを見つけていくのが非常に大事な気がするので、そういうこともワークショップの中でやるのがいいのではないか。その辺の見方を伺いたい。

8 **【黒田氏】**

○ 先ほどの質問とも関連してくるが、治療の部分に関しては、まだ私たちはあまりきちんと何かできるということには至っていない。例えば、静岡県立大学や黒部市社協は、この地域の課題をどうしたらいいのかと、そもそもそういう問題設定をしていて、その中で、まず自分たちの現在の姿を知ろうということでの診断ツールを採用してくれている。この診断ツールを使って治療するというよりは、そういう元々地域のことを考えている人が色々検討もしている。だから、私たちはその中のプロセスの本当に一部にしか入っていないのにこれでいいのかということもあったり、ワークショップでもう少し先まで踏み込んで欲しいという意見もある。私たちの体力も非常に限られていて力も小さいので、今後数カ所とじっくり付き合う形で今の意見も含めてもう少し改善し、地域に何か貢献できればと思っている。

○ そういうことを後押しするようなことが推進するようなところでできると、一番いいのではないか。

○ 言葉の問題だが、沖縄の村などで色々話をしていると、やはり「SDGs」と言うとか何か難しいので自分たちが知っている言葉に置き換えられないかという話をよく聞く。その辺り、色々な地域で活動していて、どうすればいいかという妙案があれば伺いたい。

26 **【黒田氏】**

○ 「SDGs」というのは本当に分かりにくい言葉で、もっと分かりやすい日本語に置き換えることができたらいとは私も常日頃思っているが、妙案は特にない。先ほど岡山のESDの話をしたが、地域の人にしてみると、「ESD」「SDGs」など3文字のアルファベットが結構多いので、また新しいものが来たのかと思われてしまう。中身というよりも言葉で少し距離感を持つ人もいるので、そこを突破できるためにももう少しみんなが腹落ちしやすい言葉があるといいと思っている。ぜひそういうことは知恵を出し合って、何かできたらいい。

○ 言葉は難しい。外務省が最近素晴らしいアニメーションを作っている。吉本との連携など、あのようにして分かりやすい言葉を作ってもらえれば、また一層普及するのではないか。

40 **【外務省】**

○ 今回、エンターテインメント系の方々の関与はある意味、裾野を広げる意味では非常に力を実感した。もちろんその先のところをつなげていくことが非常に重要だが、その経験を通じて、私ども役所があまり慣れない中で、広告代理店などにアドバイスをもらいながらやれたことが成功の鍵だったと思っている。

○ 先ほど委員から治療をどうするかと発言があった。治療の主役は、自治体当局だと思う。だから、NPOの役割は、まず市民の中の問題点を発見し、それを見える化してもらうことが最初だと思う。

2. ステークホルダーヒアリング②

・博報堂CSRグループ推進担当部長 川廷昌弘氏

○ ある意味ボトムアップで、現場でやっていること自体が、SDGsそのものだとすることを実際の経験に基づいて話して貰ったと思うが、先ほど議論になったSDGsのようなものをどうやってローカルなコンテンツの中に入れていくかというときに、2011年以降の経験の中で、国際的な共通言語で発信するというところへの抵抗感がなかったというか、ある種の必要があったという話だった。もう一つ、現場で活動する中で、色々な活動が色々なSDGsに関わっていると説明された部分と、他方、現場の中でやるときに、単に一つの目標なりではなく、色々なものがどこにつながってくるのかということ議論すること自体が議論を活性化したり、まさに色々つなげたりする上で役に立ったという側面もあるのではないかと思う。SDGsのような、ある意味では若干抽象的だが、色々な観点というものを並べてみて議論することがローカルで色々なものを組織する上で、どう有効なのか、あるいは有効にしていこうと思うとどういう工夫が必要なのか、その点に関してコメントをいただきたい。

【川廷氏】

○ 「町民」と一言で言っているが、全くこういう取組に関わっていない町民もいる。まだ仮設住宅にしながら、これどころではない人たち、自分たちの暮らしそのもので目いっぱいの人々もいるので、町民全員がSDGsが分かっているわけではなし、このプラットフォーム事業の存在を知らない町民もいる。ただ、町民の中でもやはりリーダーとなる人たちがこういう取組を進めて町を輝かせることにより、苦しんでいる町民も元気付けていくことになるだろうという、その波及効果、ここが重要だと思っている。SDGsに関して、やはり自分たち自身が課題を持っているという意識は、非常に強い。だから、その課題を誰とどう共有すればいいのかが、一つの課題だったと思う。つまりジェンダーの課題がある。例えば、女性がシングルマザーになって、子育てが大変で、誰と共有すればいいのかということで、コミュニティをつくり、ウィメンズアイがシングルマザーたちの集まりをつくることによって、共同体を一つ作った。今度は逆に、シングルマザー以外の人たちにどうやってメッセージを出せばいいのかというときに、一つのジェンダーのアイコンを使うことによって、世界でもこういう課題がある中で、南三

陸ではその課題解決のためにこういうことをやっていますという説明がしやすくなる。
2 いわゆる共通言語や共通アイコンだということで、「なるほど、SDGsというのはこう
4 いうことなのですね」という腹落ちをされる方も出てくる。これまで、やはり自分たち
6 は課題を持っているので、課題解決はしているのだけれど、それを他の人と共有するた
めにどうしたらいいかというときに、このSDGsのツールが活かされている感じがし
ている。

8 ○ 16枚目のスライドで全体像を見せて、これが非常に分かりやすいと思った。例えば、
1、2、6、10などが抜けているが、格差や水など、間接的には入っているところがあるの
10 で、もう全体を入れ込んでもいいような気がした。では、これを他の自治体がどう共有
できるかというのを非常に興味深く伺いたいのだが、やはり各自治体でSDGsの要素
12 は持っているが、その切り出しが非常に容易ではないとこれまでも議論してきたような
気がする。今回、話を聞いている限り、やはりブランディングが非常に鍵になって、F
14 SCとASCの2つの産業化なりブランディング、これがまちづくりにもつながってい
ったり、あるいはバイオマスのようなところにつながっていったような話で拝見すると、
16 そういう一つのクロノグラフというか、時系列でどんな形で発展していったかという、
自治体で作る計画の予定以外に、相互の関係性のようなことを一つ切り出してもらい、
18 各要素間の発展性のようなことを提示してもらえると、非常に各自治体で共有できる
のではないかと思った。ただ、このアプローチだと、まず現場に入り、その地域の良さ
20 を見てという現場固有の会があるという考えになるのか。どのように共有できるかにつ
いて考えを聞きたい。

【川廷氏】

24 ○ 大事なものは、地域資源は何かだと思う。SDGsを伝えようとするのが目的ではな
く、あくまでも地域で生きていくためには何が必要なのかということの議論だと思う。
26 つまり、地域には何もない、田舎には何もないではなく、そこには豊かな自然がある、
米が作れるなど、本来、昔はそれが豊かであったもの、そのものが一体何なのか、やは
28 り今の時代で考え直すことではないかと。それを掘り起こすプロセスとしてSDGsが
機能するのであれば、重要ではないかと感じている。つまり南三陸ではFSCやASC
30 を取ることは目的ではなく、一つの自分たちの技術や技などを証明するために、たまた
ま国際認証が使えると。そうすると国際的に共通言語になるという理解があった。SD
32 Gsと同じ考えである。これは要するにシンボル、アイコンだと思う。それによって、
自分たちは国際認証に資する事業を江戸の昔からやっていたのだという自負を満たす
34 ことにより、これを取った。ただ、取ったからといって、これで物が売れるとは誰も思
っていない。つまりこの後、これを取ったことによって、どうやってこの高付加価値商
36 品を作っていくのかということは、自分たちの地域の知恵がなければ作れないという考
え方。だから、いかに地域資源を、自分たちの地域特性を理解して、それを他の地域に
38 はない魅力として発信していくかという考えがベースがあるからこそ、この議論ができ
ると思うし、FSCやSDGsなど、誰もそういうものを付けるためにやっているわけ
40 ではなく、結果論、付けることによって、その自分たちの努力や汗が世界との共通言語

になるのであれば、付けて説明すれば楽でいいという考え方である。そういう形で、どの自治体でも多分ある地域資源の掘り起こし、宝の掘り起こしとよく言う。そこが一番重要だが、やはり外の人間が民の側に入ることによって、色々な動きがある。それをどうやってプロデュース、コーディネートするか、やはりその人材が非常に重要になってくるのではないかと感じるし、町民から「あなたは非常にまとめ力がある人だ」と言われた。町民と言い合いもするし、口論にもなるが、そこは膝を突き合わせて話すことにより、みんながやりたいことが一体どういうことなのか、そこを取りまとめる力が求められるのではないかとと思う。そこがないと、確かにこの動きにはなっていないような気がする。

- 委員の発言の一部だが、このような要素、海の話があり、山の話があり、まさに地域資源は色々な形であると現場で認識されると思う。どういう手順でやっていくか、若干結果論なのかもしれないが、実際に人を派遣したり、リーダーシップを発揮できる人が何かやることによって、次に何かやる時の示唆になるのかもしれない。そういう意味で言うと、結果論のストーリーなのかもしれないが、どういう手順でこの話が動いていったかという側面での整理も面白いのではないかとという趣旨だったのではないかとと思うが、そういう観点で見たときに、どういうストーリーとして描けるのか。

【川廷氏】

- 私自身は住民として住んでいるわけではないので、常に町の中でコミュニケーションが取れる人の中でリーダーを見つけることが重要だった。それは年齢などに関係なく、やはり言っていることの本質がこの取組でぶれていない人で、本質的に周りからも信頼されている人、そういう人を見つけて、その人々に対してディスカッションをして、その方々の意見を構築していくことのサポートはした。ただそれも、産業、林業をやっている人、それから自然保護をやっている人、漁業をやっている人、やはりそれぞれ違うジャンル・フィールドの人たちをうまく見つけていき、そういう人たちを配することによって、意見がうまく集約されるような仕組みも多分やってきた。これは結果論だが、自分が理解するのに、どうすれば分かりやすい仕組みになるか考えながら作っていった。このプラットフォームそのものも、そのために作ったものなので、これを作ろうと思って入ったわけではない。やっていくうちに、どうしてもこのプラットフォームは必要になるなと思ったので作っていった。色々な課題に当たりながら、結局積み上げていったら、結果的にこういうものができていた。そうすると町が注目して、町のブランド推進のプラットフォームそのものを考えていくようになっていったという、そのヒントを落としていったような気がする。

- 山の話は2015年7月で、海は2016年2月という、この順序はたまたまという感じなのか。山でやってみたことによって何か色々なことが促された、そういう時系列の側面はあるのか。

【川廷氏】

2 ○ 山が随分前から積み重ねていたことは事実だが、やはり震災後、ASC・FSCを取
4 りたいというのは、やはり両方、産業振興として視点があった。ただ積み重ねてきたも
6 のが早かった分、山の取得が早かった。実は、ASCは日本で初めてだったので、審査
会社も審査資格がなかったということもあり遅れた。ほぼ同時に取れるのではないかと
いうことで私も詰めていたが、結果的にはずれが生じた。

8 ○ ここまで色々やって、次のステップはこういうことをスケールアップしていくという
話なのではないかと思う。そのために例えば、この色々な取組をやっていると発信して
10 いく上で、何かプラットフォームがあって、そこで発信していくことも一つ、あり得る
のではないかと思う。そういうことも含め、この場で議論するような、政府がサポー
12 トするため、又は今後サポートしていくために、もうちょっとこういうことがあるとや
りやすいというようなサジェスションがあれば伺いたい。

14

【川廷氏】

16 ○ 私がいつまでも関わることができるかどうか分からない。だから、やはり地域のリー
18 ダーを育成しなければならないと実感している。色々なパートで担ってきたパートのリー
ダーではなく、この全体、私の代わりをやってもらえるようなリーダー育成をしなければ
いけないということが大きいと思う。そのリーダー育成は、結局、南三陸のことだけ
20 を知っているのではなく、世界の動向を理解できており、SDGsの潮流が分かっ
ていて、SDGsだけではなくサステナビリティそのものに理解があり、自治体で何をす
22 べきかなど、色々な広範囲の知識を付けてもらわないと、今後これを発展させていくの
は非常に難しいのではないかと感じる。まだ、これは農業が入っていないし、そういう
24 知識も必要になってくるということが一つ。SDGsを自治体で根付かせることができ
る人材はどういう人材なのか、やはり検証してもらいその人材育成をすること、それを
26 どう派遣するのか、もしくは町の中の人材をどう育てるのか、そこが非常に重要だと思
う。あとは、やはりどう考えても資金が必要になってくると思う。その資金の付け方を
28 どうするのか、人材育成プログラムの資金なのか、それとも事業を支援するものなのか。
国の支援はなかなか人件費が入ってこないというのもあるので、やはりタイムチャージ
30 をどうしていくかも考えなければいけないので、資金面をどう考えていくのか。基本は
地域資源を掘り起こし、SDGs達成というよりも地域資源を掘り起こして、地域の中
32 でみんなが豊かに生きていけるためにどうするかという根本的なことを考えながら、そ
れを共通言語としてSDGsを張り付けることになるので、ここだけの議論ではないの
34 かもしれないが、ここをきっかけに議論が前に進めば、大きく地方創生に資するもの
になるのではないかと感じる。

36

38 **3. 第1、2回検討会における委員の意見取りまとめ（中間取りまとめ（たたき台））につ
いて**

40

・事務局から説明（略）

2

○ 環境未来都市が広がり、その前の環境モデル都市がそうだったということなので、最初
4 初のところパリ協定の話も少し触れた方がいいのではないか。というのは、SDGs
6 の中でも、パリ協定の取組を尊重すると、できたタイミングは前後したので、パリ協定
8 ができる前にSDGsができたのでそういう書き方をしているが、この前の国連ハイレ
ベル政治フォーラム（HLPF）などに行って議論を聞いてみても、やはり温暖化の取
組の重要性が非常に言われているので、その点は書いた方がいいのではないか。

10 ○ 4頁。要は「環境未来都市」というのは先行例だというのはいいのだが、その最後の
12 ところで、「構想を更に発展させ、新たにSDGsの手法を取り入れて戦略的に進めてい
14 く」ということだが、逆に言うところどこまでが先行例で、どこからが新しい、未来都市自
16 身にとっても課題なのか、もう少し具体的に書き込めるといいのではないか。今の書き
18 方だと、「更に発展させ」と、それはそうだが、どこを発展させる必要があるのか、多分
20 触れていかないと明示されないのではないかと思う。恐らく、先ほど紹介していただ
いた案だと、幾つかそれにヒントになるようなことを、われわれの議論の発言の中にもあ
ったと思うので、その地域課題の可視化、情報の話、あるいは、多分すごくラフな言い
方だが、経済、社会、環境と三つでザクッといったものを、17で、ある意味で丁寧に、
色々な施策を構造化して議論できるようになるとか、何か少し具体的なことを入れてい
ただいた方がいいのではないかと感じました。

22 ○ それに関して、事務局と話している。環境未来都市・環境モデル都市にアンケート調
24 査でもやって、具体的に過去の未来都市構想で、成果や問題点、失敗したこと、それで
26 今度、SDGsにどうつなげていくかという辺りを調査して、それを反映するようなこ
とも、先生と多分同じ問題意識を共有していると思う。

26

○ 言葉の使い方について。「目標の可視化」というのが時々出てくるが、若干違和感があ
28 る。われわれが議論していく課題は、結構、地域課題の可視化をする、その上で目標を
具体的に設定するようなことだと思うが、目標が可視化されているのはある意味当たり
30 前のような気もするので、むしろ「地域課題の可視化」ということを強調して欲しい。

32 ○ 全くそのとおりである。「目標」というと、SDGsだと、そのままこれはゴールにな
ってしまふ。各自治体の政策ビジョンの可視化ということ。

34

○ まず課題を可視化した上で、それに即して目標を具体的に設定することが大事。そう
36 いう表現にするといいのではないかと。

38 ○ 要するに普遍的な言語で語ることによって、ある種、海外にモデルとして輸出する際
にも役に立つというような、自分たちだけではなく、外に持っていくときのメリットの
40 ようなこともあったと思う。どこに書いたらいいかわからないが、12頁辺りではないかと。

- 2 ○ 13 頁辺りで、自治体に何を期待するかとか、15 頁辺りの具体的な、自治体が取り組む
べき事項のところが変わる。国との調整、色々な地域の単位での調整というのもそうだ
4 が、自治体の中で色々なセクターの間を調整するのは結構重要で、ある意味では環境未
来都市でも色々な効果があった。経済と福祉、福祉と環境などである。そういう意味で、
6 セクター間の調整のような話もどこかで触れるといいのではないか。15 頁の「(3) 各種
計画の策定」のところ、若干唐突に「政策間連携」と出てくる。多分、そういうのを
8 発展させたようなことかと思うが、その辺についても触れるといいのではないか。
- 10 ○ 縦割りを乗り越えるという若干ネガティブだが、むしろ色々なシナジーをこうやっ
て、まさにパートナーシップを作ってやっていくかという、組織の中でそういうことを
12 協調してやるという理解を示してはどうか。
- 14 ○ それはまさに首長のガバナンスになる。
- 16 ○ 今の点に関して、環境未来都市、環境モデル都市で成功している事例を見ると、非常
に強力なガバナンスで、リーダーシップの下、横断的な組織ができているところは非常
18 に推進力ができている。これは最後の方にそのような体制を作るということをサラッと
言っているが、前半のところにもう少し横断的な取組が必要だということを言っても
20 いいのではないか。
- 22 ○ 他の委員の発言にもあったが、環境未来都市の振り返りについては、少し丁寧にやっ
て欲しい。非常に細かいが、8 頁に使っている図なども、一度色々環境未来都市は図を
24 作ったが、スパイラルで課題を解決していくダイナミズムのようなものを表現した図が
あった。多分、経済・環境・社会というのは当時としては新しい多様性だったのだが、
26 やはりこの段階に来ると、それをガバナンスによってダイナミックに解決することが環
境未来都市の一つの特徴であったように思うので、そういう丁寧な振り返りをして欲し
28 い。
- 30 ○ スパイラルの図は私も時々使っているが、どちらかというと、十二分にうまくいかな
かったから、今後のSDGsであれをさらに活用するぐらいの、そういう言い方が
32 いいのではないか。
- 34 ○ 同じようなところだが、12 枚目にあるSDGsの今後の展開ということの12 行目辺
りに、当時はもう「課題解決型」と言っているのだが、今、自治体の方々、あるいは日
36 本の国民としても、問題を解決することは若干もう慣れ過ぎていて、やはりこうしたS
DGs的な取組が新しい価値を生む、新しい未来に向かうということをもう少しポジ
38 ティブサイドに言って、例えば、統合的に地方の活力を未来にわたって創出する、何かそ
ういう課題を解決するというより、もう少し前を向くような表現の方がいいので
40 はないか。

- 2 ○ そのとおりである。いわゆるバックキャスティングというのは、2030年の価値から逆
算してやりましょうということ。課題解決のことを言ってしまうと、今から、いわゆる
4 フォワードキャスティングになってしまう。
- 6 ○ われわれの研究チームは、バックキャスティングを強く使ったチームではあるが、バ
ックキャスティングそのものも何か予定調和的に聞こえるため、少し違う言葉を使って
8 もいいのではないか。
- 10 ○ 17枚目の23行目に、色々な振り返り、この目的の中で、「先端的な技術を複合的に」
ということを行っているが、多分この前に、「社会技術を見える化」というような、単な
12 るハードな技術だけではなくて、それを使う官民合わせた社会の技術ということ強調
していただいたところがある。これを、全体的に言葉を使うと、多分、「先端」よりは「先
14 導」、あるいは「先進」とか、技術というの、単体の技術あるいはハードな技術に見え
ないように「社会技術」、あるいはそれに代わる言葉を少しぜひ工夫してもらうのを、こ
16 の委員会も含めて、手伝えればと思う。
- 18 ○ 指標についてだが、230とあるが、どうも232ぐらいになりそうだという話を聞いて
きた。今年の9月には多分決まると思う。それはグローバルな指標であり、ローカルな
20 指標というのは、自治体などが作っていくべきものも含まれると思うので、そういうと
ころをどこかに入れた方がいいのではないか。指標で定量的に示す、進捗を表すという
22 のもすごく大事だと思うが、同時にSDGsは量から質にというシフトがあり、指標だ
けでは捉えきれないところもかなり出てくると思う。だから、定性的なところへの目配
24 りは強調しておいた方がいいのではないか。指標を出すと、もう指標だけでいってしま
う、それだけを目指すところがあるので、そうではないというところを出しておいた方
26 がいいのではないか。
- 28 ○ アプローチが全く変わってくる。2030年から振り返ってやるというので、多分、予算
の請求の仕方なども、本当にやろうと思ったら変わってくると思う。そうすると、条例
30 など、そういう基本的な動きを支えるような仕組みも大事になってくるので、新たな条
例や基本条例のようなものを作る、そういう新たなアプローチだという点を強調するの
32 と、それをするための根拠をやはり各自治体でも検討してもらいたいということを、ど
こかに入れていただくのがいいのではないか。
- 34 ○ 17頁で「普及促進活動の展開」とあるが、これは「促進」と、一方的に普及促進する
36 だけではなくて、参加者自治体が横のつながりというか、相互学習をするような点も大
事だと思うので、そういう点に触れていただくのがいいのではないか。
- 38 ○ 他の委員の発言にもあったが、23～24行目辺りで「モデル事業」ということだが、今
40 日の報告にもあったが、多分、草の根レベルで色々活動されていて、支援がもっとあれ

2 ばもっと色々できるというところもあると思う。パートナーシップや草の根レベルの活
動への支援、そういうことを含めたモデル事業をコンセプトとして出していくと、そう
4 いう動きも出てくるのかな、促進されるのではないか。

6 ○ 今、「定性的な評価」と発言があったが、それはインディケータを使って計測する
というのを、定量と定性と2つあるのではないかというご指摘か。それとも、インディ
8 ケータ以外の評価の仕方があるのではないかという指摘か。

10 ○ インディケータ以外である。例えば、女性の雇用を増やすといっても、女性の何と
かの数だけではなく、その話というのは、保育所の数や、どこにしっかりした保育所が
12 あるか、そういうところも含めて考えないと女性の活躍はちゃんと測れないというこ
だと思う。よって、数(定量)以外のところもしっかり勘案すべきだという考えである。

14 ○ それはインディケータに2つあり、非常に定量的なインディケータもあれば、も
う少し定性的な評価しかできないインディケータもあるだろうと、そういう理解でい
16 いかということか。少なくとも一応、測るのが定性か定量かは別として、仕組みとし
てはインディケータで全部測るのだと、それがいいというわけか。

18 ○ そこも議論があるところだと思うが、例えばグローバルな方でも、定量的には毎年、
20 国連事務総長の報告書が出ていく。それで、どのぐらい進捗したか、数で分かること
22 になっているが、それとは別に、2019年にGlobal Sustainable Development Reportとい
う、もっと定性的な動きを含めた報告書が出るということになっており、その両方を合
24 わせて「進捗管理」と言っている。私が言いたいのは、どちらかというと量で示され
ない、インディケータでも示され得るかもしれないが、示すためにはかなり工夫は必要
な、というので、量で示されないところという意味である。

26 以上